

黒漆螺鈿采配(三巴紋御玉貫の蓋付き)修理業務

上江洲安亨¹、高田明²

I. はじめに

本作品は一般財団法人沖縄美ら島財団所蔵「黒漆螺鈿采配」である。令和3年9月1日から令和7年7月31日まで公益財団法人美術院にて修理が行われた。修理にあたり担当職員を上江洲安亨とし、修理担当者を高田明が担った。

II. 令和3年9月

1. 沖縄美ら島財団所蔵の黒漆螺鈿采配を沖縄県立博物館・美術館事業である琉球王国文化遺産集積・再興事業（平成29年～30年度）で復元模造製作を行う御玉貫蓋の参考資料として借用し、現状写真の撮影を行っていた（図1～6）。



図1 修理前写真①



図2 修理前写真②



図3 修理前写真③



図4 修理前写真④



図5 修理前写真⑤



図6 修理前写真⑥

¹一般財団法人 沖縄美ら島財団 首里城公園管理センター 副参事

²公益財団法人 美術院

2. 令和3年度9月より本修理作業を開始した。まず損傷個所の調査を行い、記録をとり、蓋の図面（上部・側面・展開図等）を製作した（図7）。また、ガラス玉を発注するため、ガラス玉の色味と形状を確認し、大きさの計測を行った（図8～11、表1）。



図7 損傷個所の調査



図8 ガラス玉の色味の確認



図9 ガラス玉の形状確認

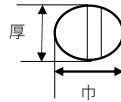


図 10 ガラス玉の色味の確認



図 11 ガラス玉の大きさの計測

ガラス玉の大きさ



巾	緑		サンプル番号25か38		黄		巾	赤		サンプル番号8		白		サンプル番号11	
	厚	備考	厚	備考	厚	備考		厚	備考	厚	備考	厚	備考	厚	備考
4.1	2.9		4.2	4.0 (角あり)	4.2	3.0	4.2	3.0		4.3	3.0				
4.2	2.9		4.3	2.9		4.1	3.0		4.2	4.2					
4.8	2.5		4.6	3.6		4.1	3.2		4.3	3.6					
5.0	4.3		3.9	3.5		4.2	3.0		4.5	4.0					
5.1	3.6		4.0	3.1		4.2	3.2		4.6	3.9					
4.2	3.4		4.2	2.6		4.1	3.1		4.2	3.9					
4.2	3.2		4.6	3.6		4.5	4.1		4.8	3.2					
4.1	3.2		4.6	3.9		4.4	3.8		4.6	3.0					
4.4	2.6		4.2	3.0		4.5	3.6		4.1	3.6					
4.6	3.0		4.3	4.0 (角あり)		4.1	3.1		4.1	3.5					
4.1	2.9		3.9	2.9		4.1	3.0		4.1	3.0					
↓	↓		↓	↓		↓	↓		↓	↓					
5.1	4.3		4.6	4.0		4.5	4.1		4.8	4.2					

表 1 ガラス玉の大きさ

III. 令和3年10月

- 引き続き、補足に必要なガラス玉の色味・個数等を調査し、過去の修理で使用したガラス玉の色味と照らし合わせ、サンプルを添えて(株)佐竹ガラスに試作品を依頼した(図12~15)。



図 12 色味・形状・大きさの確認



図 13 色味・形状・大きさの確認



図 14 色味・形状・大きさの確認



図 15 ガラス玉の試作品

2. 蓋については図面を作成し色付けを行った後 (図 16・17、資料 1)、ガラス玉の総数を確認した (図 18)。



図 16 図面の作成①
確認

図 17 図面の作成②

図 18 ガラス玉総数の

- 10月27日には(株)佐竹ガラスより各色のガラス玉試作品が届いたため、原本に照合し、色味・形状・大きさの確認を行った。黄・赤・緑の色味については微調整が必要であることが判明し、原本の色味に近づけるため、佐竹ガラスに再検討を依頼した(図19~22)。



図 19 試作のガラス玉

(緑)



図 20 色味・形状・大きさの確認



図 21 色味・形状・大きさの確認 (黄)
(赤)



図 22 色味・形状・大きさの確認

IV. 令和3年11月

- 引き続き、(株)佐竹ガラス作成のガラス玉(図23)を原本と照合し(図24~26)、比較と検討を行い、色味・形状・大きさの変更を指示した上で、再発注を行った。



図 23 試作品のガラス玉



図 24 色味・形状・大きさの確認 (赤)

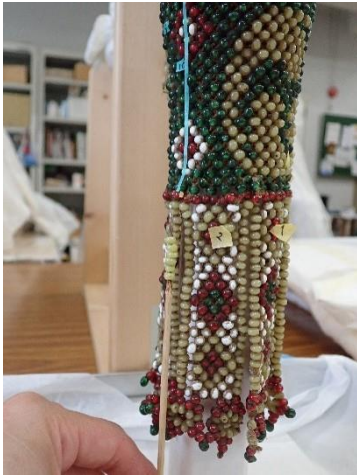


図 25 色味・形状・大きさの確認 (黄)
(緑)



図 26 色味・形状・大きさの確認

- 再度届いたガラス玉を原本と照合した所 (図 27~31)、色味・形状・大きさなどは、かなり原本に近づいたものの、黄色のガラス玉は色味が少し濃いため、薄めで再度発注をかけた。



図 27 原本との照合



図 28 ガラス玉の試作品

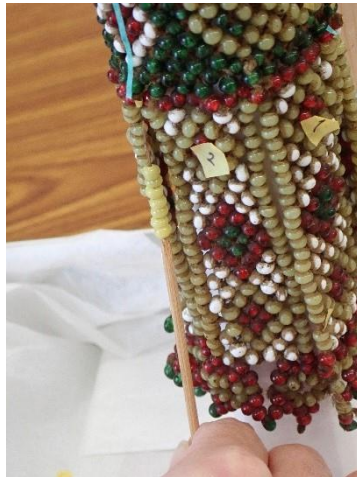


図 29 色味・形状・大きさの確認 (黄)



図 30 色味・形状・大きさの確認 (緑)



図 31 色味・形状・大きさの確認 (赤)

(赤)

V. 令和3年12月

1. (株)佐竹ガラスより、製作を依頼していた残りのガラス玉が届き、原本との照合を行った結果、黄色のガラス玉は色味がかなり原本に近づいた (図 32～34)。



図 32 原本との比較 (黄)



図 33 原本との比較 (赤)

図 34 原本との比較 (緑)

2. ガラス玉の選別と点検を行い (図 35)、各色補足のガラス玉がほぼ整った (図 36)。

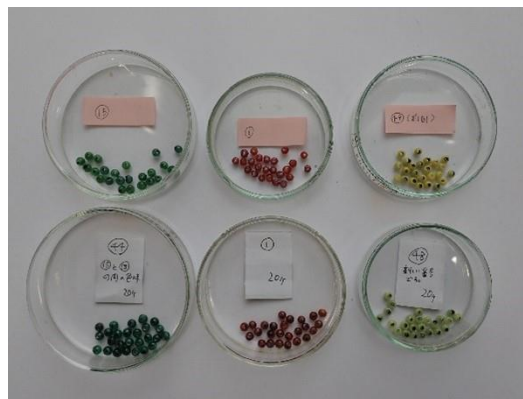


図 35 ガラス玉の選別と点検

図 36 補足のガラス玉

3. 修理・補足に使用する苧麻紐を柿渋で染め、繊維を水にさらし、細めの束で救い上げた (図 37)。



図 37 苧麻紐の選別

4. 次に紡錘車に苧麻の繊維を巻き付け撻りを掛けた（図 38～40）。紐の強度を上げ、ガラス玉を通す際のすべりをよくするために蜜蝋を目摺り込んだ（図 41）。

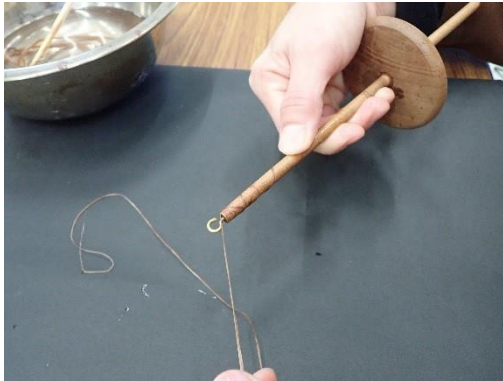


図 38 苧麻紐の加工①



図 39 苧麻紐の加工②



図 40 苧麻紐の加工③



図 41 苧麻紐への蜜蝋の目擦り込み

5. 補足に使用する苧麻紐は、原本より少し細めにする必要がある（図 42）。



図 42 補足に使用する苧麻紐

6. 原本の亀裂箇所には既にオリジナルの紐が 2 本入っている。補足の際には、亀裂周辺のオリジナルのガラス玉に新たな紐を通しながら、補足ガラス玉（新）を通していかなければならず、原本と同程度の太さの紐を通すとガラス玉に負荷がかかり、割損の危険性が生じる（図 43～45）。



図 43 原本の紐と補足の紐の比較①

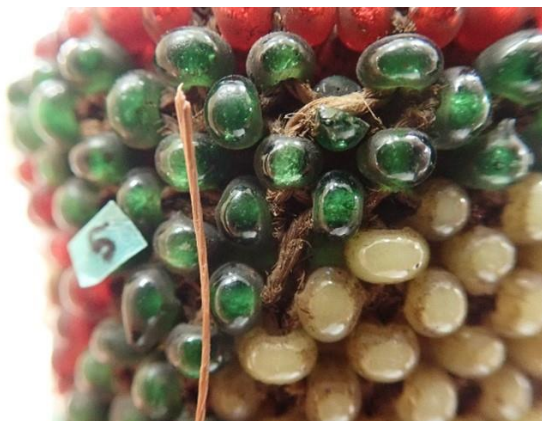


図 44 原本の紐と補足の紐の比較



図 45 原本の紐と補足の紐の比較

VI. 令和4年1月

1. (株)佐竹ガラスより届いた各色ガラス玉を、補足する箇所の色味・大きさ・形状などを確かめ、欠失箇所に補足するガラス玉を予め選別を行い、効率化を図り(図46~50)、垂飾部の欠失する箇所より、補足作業に入った。



図46 原本との照合



図47 原本との照合(赤色)



図48 原本との照合(黄色)

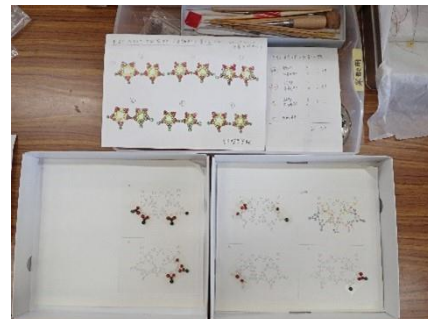


図49 選別したガラス玉



図 50 補足した箇所記録

2. 各垂飾部の編み方について、紐の通し方や新補ガラス玉の記録をとるための図を作成した。作成した図に、新たに紐を通した部分や新しいガラス玉を補足した箇所の記録を取りながら進めている。垂飾部のガラス玉亡失箇所の多くは、紐が1本のみ通る箇所強度がない部分であった（図 51・52）。



図 51 ガラス玉亡失箇所

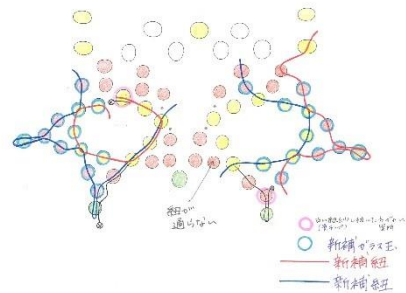


図 52 作図した垂飾部の記録

3. 選別したガラス玉を新たな紐で補足作業を行ったが、原本のガラス玉には古い紐が詰まっている状態ではなかなか針が通らない箇所がいくつもあった（図 53・54）。



図 53 紐の補足作業

図 54 補足後の状況

- VII. 垂飾部の補足で原本のガラス玉に新たな紐が通らない箇所は古い糸を少し抜き取る作業も行わなければならない、慎重に進行することにした（図 55）。



図 55 古い紐を抜き取る箇所

VIII. 令和4年2月

1. 胴部正面下部で亡失している箇所を、堅牢な部分を参考に補足作業を行った（図 56）。新しいガラス玉を色味や形状、大きさなどを照合し選別した（図 57）。



図 56 胴下部ガラス玉亡失箇所



図 57 新補ガラス玉選別

2. 補足作業は編み方の手順を確認し、紐を通す位置を推測しながら作業を行った。緑色ガラス玉2箇、赤ガラス玉2箇を亡失箇所に補足し、記録を取った（図 58）。



図 58 ガラス玉（緑）補足①



図 59 ガラス玉補足（緑）補足②

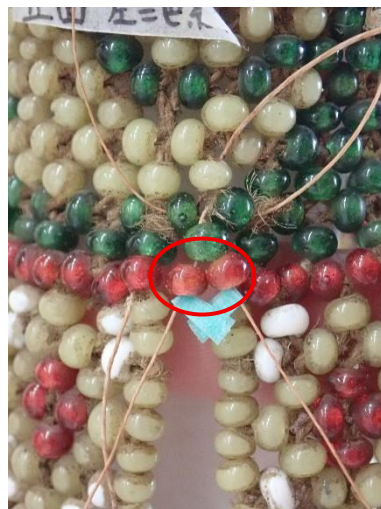


図 60 ガラス玉（赤）補足

3. 原本のガラス玉に紐を通す際、ガラス玉の穴内はすでに紐が詰まっている状態なので、針に通した新しい紐を入れづらい箇所は、元の紐を少し抜き取る作業を行った。

IX. 令和4年3月

1. 2月の作業に引き続き、胴部下部で亡失している箇所に補足作業を行った

(図 61)。亡失箇所に新しいガラス玉を色味・形状・大きさを考慮して選別し、新たな紐で繋ぐ作業を行った (図 62)。古いガラス玉には紐が詰まっている箇所が多く、新たな紐を通すのには慎重に作業を進めた



図 61 ガラス玉亡失箇所



図 62 ガラス玉補足作業

2. 胴部三巴紋の箇所に割損欠失があるのを確認し、記録をとった。ガラス玉が割損して紐のみが残る箇所には新たなガラス玉を割り入れ接着することとした (図 63)。またガラス玉が亡失し紐が切れている箇所には新たな紐とガラス玉を入れ、範囲を広げて編み込むこととした (図 64)。



図 63 ガラス玉割損箇所



図 64 ガラス玉亡失箇所

X. 令和4年4月

1. 3月28日進捗状況の確認を行い、修理方針などについて話し合いを行った。采配や御玉貫を並べてガラス玉の色味や形状、大きさなどの比較・検討し、

状況を説明した。修理終了時には図解と共に修理箇所が判別できるよう新補ガラス玉に印を付けることとした（図 65）。



図 65 修理作業方針の打ち合わせ

2. 3月の作業に引き続き、胴部下部、垂飾及び星形で亡失している箇所に補足作業を行った（図 66）。古いガラス玉に詰まっている紐をピンセットで解しながら少し抜き取った（図 67）。古いガラス玉に紐を通しやすくするため（負荷をかけないように）、針と新たな紐も以前より細いものを使用し、星形部分の古いガラス玉と繋げるように形を整えながら編み込んだ（図 68）。



図 66 垂飾星形部分ガラス玉亡失箇所



図 67 古い紐を解しながらガラス玉を補足している様子



図 68 古いガラス玉に繋げるように紐を通し、編み込む様子

3. 胴部下部では紐の断裂とガラス玉の亡失が見られた (図 69)。垂下部への編み込みと繋げるため、原本黄色ガラス玉の穴を錐で広げて新たな紐を通し、補強しながらつなげる作業を行った (図 70)。新たな赤色ガラス玉を 2 個入れ、胴下部と垂下部分への繋がり強度をもたせながら編み込んだ (図 71)。



図 69 胴下部ガラス玉亡失箇所



図 70 新たな紐で補強する様子

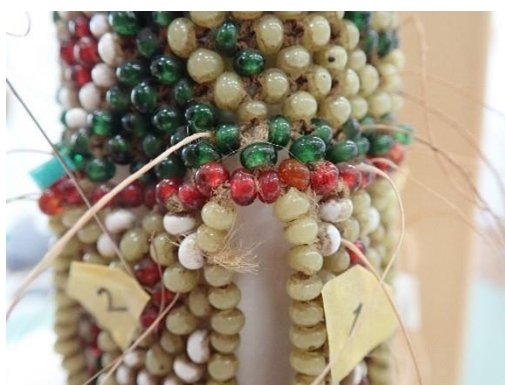


図 71 胴下部と垂下部分のつながりを補強

4. 胴部の三箇所で紐が断裂している部分があり、紐が切れていてガラス玉の穴の中に詰まっている状態なので、ピンセットや錐などで穴を広げ、新たな細い紐をこれから通すこととし、亡失箇所に補足を行いながら補強も進めていく (図 72~74)。



図 72 胴部紐断裂部①



図 73 胴部紐断裂部②



図 74 胴部紐断裂部③

XI. 令和4年5月

1. 胴部下部垂飾及び星形部分の補足作業が完了した箇所は、各所から紐が出ている状況であった（図75）。新たな紐は古い紐にくぐらせ、ガラス玉から紐が抜けないように玉結びにした（図76～78）。



図75 補足作業完了



図76 ガラス玉を固定するために紐を結

55



図77 紐を玉結びにする①



図78 紐を玉結びにする

2. 星形部各所補修に使用した新たな紐は鉋で切り取り、余った紐は裏側にまわして、全体のバランスを調整した（図79～82）。



図 79 余った紐の切り取り①

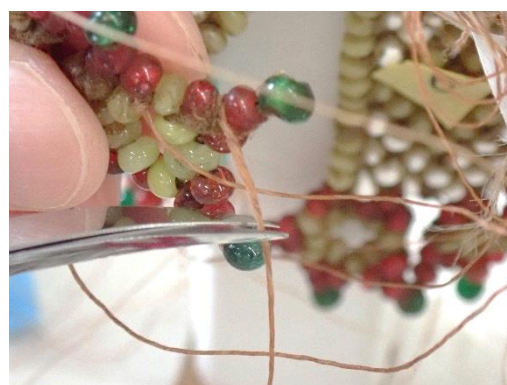


図 80 余った紐の切り取り②



図 81 切り取り後の紐



図 82 余り紐の調整後

3. 先端と古い紐の毛羽立ちが目立つ箇所にはふのりと膠の混合液（ふのり1%水溶液に0.5%の膠を添加したもの）を塗布し、毛羽立ちを押さえた（図83～85）。紐の処理が進み、垂飾星形部分が整然とした（図86）。



図 83 毛羽立ちの抑え作業①



図 84 毛羽立ちの抑え作業②



図 85 毛羽立ちの抑え作業③



図 86 紐の処理後

4. 胴部のガラス玉亡失箇所及び紐の亀裂箇所は、これより補足・補修作業を行う予定。

XII. 令和4年6月

1. 胴部および垂飾部のガラス玉割損・亡失・欠失箇所の補足、接着作業を行うため、新たなガラス玉をいくつか選び、半割りにした（図 87、88）。割る際

には印を付け、接着の為に断面を判別しやすくし、接着後は印を除去した
(図 89、90)。



図 87 ガラス玉の半割り作業



図 88 半割りにしたガラス玉



図 89 ガラス玉亡失箇所



図 90 割る前に印を付けたガラス玉

2. 胴部正面左上にクロスした紐だけ残り、ガラス玉が割損亡失した箇所があったため、半割りにした新たなガラス玉を胴部内側から紐に押し入れ、固定させた (図 91~93)。断面に樹脂 (シアノアクリレート系樹脂、アルテコ) を

点付けして、半割りにしたガラス玉の片割れを接着した（図 94）。



図 91 ガラス玉亡失箇所



図 92 半割りにしたガラス玉



図 93 半割りガラス玉の固定



図 94 ガラス玉の接着

3. 胴部背面上部にも割損・欠失・亡失箇所が見られ、ガラス玉亡失箇所①は上記と同様の作業を行った。ガラス玉が半分欠失している箇所②は紐が穴に食い込んでおり、動かすと紐が切れる可能性があったため、新たなガラス玉を上にかぶせて接着した（図 95、96）。



図 95 作業前



図 96 作業後

4. 胴部正面から左側の中央付近に断裂している箇所があったため、先月に引き続き、紐の亀裂箇所の補修作業を行った。紐が切れている箇所や編み込みの紐が1本のみとなっている部分には、新たな紐を通し強度を持たせた。また

胴部右側下部と垂飾に繋がる赤ライン状ガラス玉は補足、補修作業を行った
(図 97~102)。



図 97 紐断裂箇所

①



図 98 紐の補修作業



図 99 紐の補修後



図 100 紐の補修後②



図 101 補足紐の調整



図 102 補足紐の調整後

5. 紐の先端を少しほぐした状態で少し長めに鉏でカットし、裏側にまわすよう

にして目立たないように形を整えた（図 103～106）。最終的な処理として先月と同様、紐のほつれをふのりで少し固めるようにして表面を整える予定。



図 103 補修した紐の解し



図 104 余分な紐のカット



図 105 紐のカット後



図 106 紐の整形

6. 図解用の写真撮影を行い、写真から図面を起こし、修理箇所の記入を行った

(図 107、108)。



図 107 図原稿への修理箇所記録①

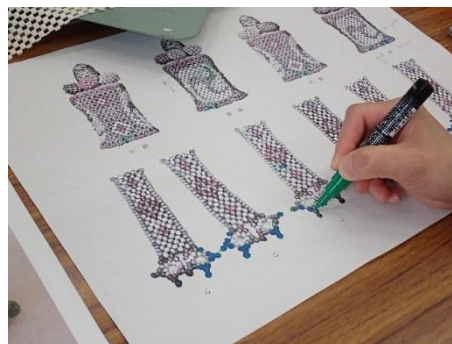


図 108 図原稿への修理箇所の記録

②

7. ガラス玉の計測、采配全体の法量計測、個数確認(約 2500 個)を行った (図 109、110)。



図 109 ガラス玉の計測

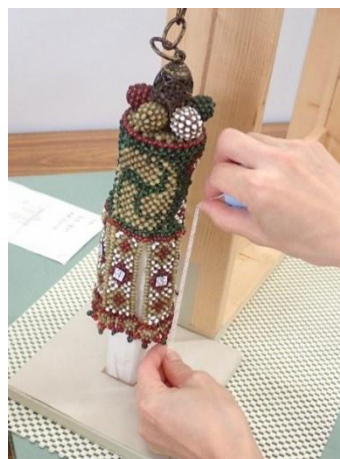


図 110 法量の計測

XIII. 令和7年7月

1. 最終的な見直しで、胴部内側の紐のほつれや新しい紐の先端を、ふのり水で少し毛羽立ちをおさえ固めて整えた（図104、105）。



図111 補修紐先端のカット



図112 毛羽立ちの抑え作業

2. 表側からは修理箇所が判別しにくいいため、新しく補足したガラス玉の位置がわかるように、白色エナメル塗料で印を付けた。胴部（下赤ガラス玉界線を除く）の補足箇所に関しては、作業的に困難であったため、印の点付けは行わなかった（図113～118）。



図113 新補ガラス玉の目印①



図114 新補ガラス玉の目印②



図115 新補ガラス玉の目印①表



図116 新補ガラス玉の目印①裏



図 117 新補ガラス玉の目印⑤表



図 118 新補ガラス玉の目印⑤裏

3. 蓋内内側麻布部分に墨書きが見られたため、赤外線カメラでも撮影を行った（図 119～121）。



図 119 蓋内側麻布部分の墨書き

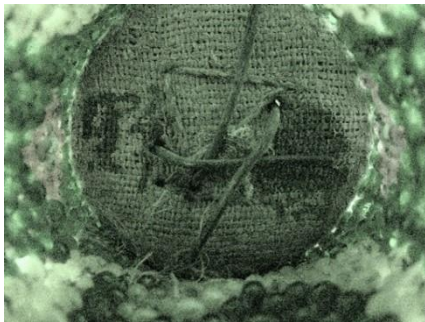


図 120 墨書き部分赤外線撮影①



図 121 墨書き部分赤外線撮影②

4. 7/27（水）采配修理の最終確認のため上江洲氏来工、最終確認を行い、修理を終えた（図 113）。



図 122 修理の最終確認